

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立

小林 正美

一 はじめに

宋文明の「靈寶經目」⁽¹⁾（假稱）のなかに「九天生神章一卷。已出。卷目云、太上洞玄靈寶自然至真九天生神章。」という一條がある。「靈寶經目」⁽²⁾は劉宋の陸修靜の『三洞經書目錄』に基づくものであるから、ここに見える『太上洞玄靈寶自然至真九天生神章』（以下『九天生神章』と略す）は陸修靜が劉宋・泰始七年（四七一）に明帝に奉じた『三洞經書目錄』に載せられていた靈寶經の一つである。本稿はこの靈寶經がどのような構成になっているのかを分析し、それを通じて本經の形成の経緯を解明し、併せて本經の形成と密接に關連する、三洞説の成立の時期についても考察したい。

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立（小林）

二 道藏本『九天生神章經』

『九天生神章』に相當する經典が正統道藏に二本收められている。その一つは『洞玄靈寶自然九天生神章經』（道藏三八。以下『九天生神章經』と略す）であり、他の一本は『靈寶自然九天生神三寶大有金書』（道藏一六五。以下『三寶大有金書』と略す）である。この二本は三寶章まではほぼ同じであるが、その後の九天章と太極真人頌二首を『三寶大有金書』では缺いている。また『無上祕要』卷二十四三寶品に序の冒頭的一段が「洞玄九天經」の名で引かれており、更に卷二十八九天生神章品には序の末尾の一節と九天章が「洞玄九天生神章經」の名で引かれている。あるいは『雲笈七籤』卷十六に『靈寶洞玄自然九天生神章經』として、序の全文と九天章と

太極真人頌二首が載せられており、三寶章のみが缺けている。

このように見てくると、道藏本『九天生神章經』が最も長篇で且つ最もよく完備していることがわかる。その他はその一部か、あるいは一部分を缺くものである。しかし『九天生神章經』が最もよく完備しているからと言って、これが『九天生神章』に最も近い、あるいはそれと同じである、と安易に斷定するわけにはゆかない。むしろ『九天生神章經』がどれよりも遅れて作られたために最も整った形になったとも考えられるからである。したがって、それが『九天生神章』に近いかどうかは單に外形の比較だけでは決定できず、その内容を検討して判斷しなければならぬが、本稿では論述の便宜上、最も整備されている『九天生神章經』を基準に据えて、その内容を分析してゆくことにする。

『九天生神章經』と、『三寶大有金書』や『無上祕要』に所引の「洞玄九天經」や「洞玄九天生神章經」、あるいは『雲笈七籤』の「靈寶洞玄自然九天生神章經」とを、對照してみると、それぞれの對應部分はほぼ一致しており、『九天生神章經』が六朝末以降の『九天生神章』の姿を伝えるものとして比較的信憑性が高いことがわかる。但し、三寶章は『九天

生神章經』と『三寶大有金書』にはあるが、他の『無上祕要』や『雲笈七籤』に所引のものには見えず、また南宋の董思靖『洞玄靈寶自然九天生神章經解義』（道藏三九六）や同じく南宋の王希巢『洞玄靈寶自然九天生神玉章經解』（道藏三九七）や元代の『洞玄靈寶自然九天生神章經注』（道藏三九八）にもないところから、三寶章が陸修靜の頃の『九天生神章』にあつたことに疑問を投ずる意見もある。⁽³⁾しかし、初めに存在したものが何等かの機縁で失われて、その後缺けたまま傳承されるということも考えられるので、三寶章が後代の『九天生神章經』に見えないという理由だけで、『九天生神章』にともとなかつたと斷ずるわけにはゆかない。先ず『九天生神章』と三寶章の思想を検討し、三寶章が『九天生神章』の成立時の思想として適當であるか否かを確かめる必要がある。そしてもし不適當とわかれれば、次にいつ頃それが加わつたのかを、『九天生神章』の思想の成立と發展の過程の分析を通じて、明らかにしてゆくのがよいであらう。

このように考えてくると、『九天生神章經』の成立を明らかにするには、最初にその内容を分析することから始めなければならぬ。そこで次に『九天生神章經』の構成を見てみたい。

三 『九天生神章經』の構成

『九天生神章經』全體は冒頭から三寶章の前までの序と、三寶章と、九天章と、太極真人頌二首とから成っている。そして序の部分はその内容から大きく二分できる。前半は序の冒頭から「白日登晨」(四bの最後の行)までの部分で、ここでは初めに天寶君・靈寶君・神寶君の三寶君について解説し、續いてこの三寶君が玄元始の三氣の尊神であり、この三氣と三氣が分化した九氣との働きによって空洞の中から天地や萬物が形成され、人間が母親の胎内に九ヶ月宿って生まれ出るのも、この三氣と九氣の育養によると述べた後、九天生神章を讀誦すればいかなる福德が得られるかを詳しく説いている。この部分はわれわれの目から見ると、三寶君の解説から九天生神章の讀誦に至る経過が必ずしも論理的にすっきりした展開になってはいないが、それでも一應の連結があり、全體として一まとまりをもつものと考えられる。

序の後半部は「元始天尊、時靜處閑居」(五a一行目)から三寶章の前の「可不慎之焉」(八a五行目)までで、この部分では元始天尊が飛天大聖無極神王の懇請に應じて九天生神章を授けるに至る経緯が二人の對話を通じて述べられている。

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立(小林)

そしてこの後半部は前半部からの話の繋がりとは全くなく、突如、靜處に閑居していた元始天尊のところへ飛天大聖無極神王が現われる場面から始められている。この後半部もそれ自體として一つのまとまりをもった話になっている。したがって、序の前半部と後半部は本来別々に記されたもののようである。しかし兩者はそれぞれ全く別個に書かれたものではなく、いずれか一方が先に書かれ、他方は後からそれを見て作られたようである。なぜならば、双方に重複する部分があり、これらは一方が他方を模倣して書いたと考える以外には到底不可能なほど文章と内容が一致しているからである。それは前半部の「九天生神章、乃三洞飛玄之炁、三合成音、結成靈文、混合百神、隱韻内名」(三a)と後半部の「此九天之章、乃三洞飛玄之炁、三合成音、結成眞文、混合百神、隱韻内名」(七b)である。この他にも、前半部の「元始禁書、非鬼神所聞」(三b)と、後半部の「寶書妙重、九天靈音、施於上聖、非鬼神所聞」(七a)とは、九天生神章を「鬼神の聞く所に非ず」と述べる點で共通している。

さて、それでは序の前半部と後半部とはいずれが先に書かれたのであろうか。この問題は原本『九天生神章』の構成とその成立を考える上で極めて重要である。

宋文明の「靈寶經目」によると、「九天生神章一卷」は「元始の舊經」であるから、元始天尊から授かった靈寶經三十六卷のうちの一つである。序の中でこの經典の趣旨に合致するのは後半部である。後半部では元始天尊が九天生神章（九天章）を飛天無極神王に授けるに至る經緯が述べられており、『九天生神章經』が元始系靈寶經であることをよく表わしている。ところが前半部には元始天尊の名は見えず、『九天生神章經』が元始系靈寶經であることはわずかに「三寶尊重、九天至眞、祕之大有九重金格紫陽玉臺。自非天地一開、其文不出。元始禁書、非鬼神所聞。」（三^b）と述べるところから窺い知られるにすぎない。そもそも前半部は『九天生神章經』が元始天尊より授かった經典であることを説くことに主たる目的があるのではなく、その主旨は三寶君が三洞の尊神であるということと、この三寶君の尊重する『九天生神章經』を讀誦すれば、いかに多くの利益が得られるかということとを、説く點にある。したがって、假に後半部がなく、前半部が『九天生神章經』の序として初めに作られたと想定してみると、それは元始系靈寶經の序としては極めて不自然な序である。やはり後半部が初めに『九天生神章經』の序として作られ、後に前半部が附加されたと考えるべきであらう。

このように序の部分の成り立ちを推定してみると、本文の部分に相當する三寶章と九天章についてもその成立の經緯が推察できる。序の後半部には九天章を指す語が「九天生神玉章」（七^b）や「九天之章」（七^b）と見えるが、三寶章に觸れる語句は全く見當らない。⁽⁴⁾このことから考えると、序の後半部が書かれたときには本文は九天章の部分のみで、三寶章はなかつたものと思われる。先に引用した「靈寶經目」に依れば、「舊目」には「九天生神章一卷」とあり、⁽⁵⁾卷目には『太上洞玄靈寶自然至眞九天生神章』とあったようであるから、これらの經名から推察すれば、原本『九天生神章』が九天生神章（九天章）を本文としていたことは明らかである。即ち、原本『九天生神章』は道藏本の序の後半部と九天章の部分から構成されていたものと思われる。そして三寶章と太極真人頌二首は後に序の前半部が附加されたときに、一緒に加えられたものと推測されるが、この點については次章以下で詳しく検討したい。

四 序の前半部と《三洞說》の成立

『無上祕要』や『雲笈七籤』に所引の『九天生神章經』によると、その序の部分は道藏本とはば同じであつたようであ

る。即ち、序の前半部は『無上祕要』の編纂された北周の頃には既に道藏本『九天生神章經』の如く、後半部の前に附加された形で通行していたのである。この附加の時期はいつ頃まで遡れるであらうか。それを考究するには、前半部の一節を引用する北周以前の確かな資料を見出せない限り、前半部の思想を検討し、そのような思想の形成時期としていつ頃が最も適切であるのかを考えるのがよいであらう。この場合に、先に述べた如く、序の前半部は後半部よりも後に作られたものであるから、後半部の成立時期との關連をも考慮に入れないければならないことは言うまでもない。

序の前半部の首段で三寶君について次のように記している。

天寶君者、則大洞之尊神。天寶丈人、則天寶君之祖炁也。丈人是混洞太無元高上玉虛之炁、九萬九千九百九十億萬炁後、至龍漢元年、化生天寶君、出書。時號高上大有玉清宮。

靈寶君者、則洞玄之尊神。靈寶丈人、則靈寶君之祖炁也。丈人是赤混太無元玄上紫虛之炁、九萬九千九百九十九萬炁後、至龍漢開圖、化生靈寶君。經一劫、至赤明元年、出書度人。時號上清玄都玉京七寶紫微宮。

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立（小林）

神寶君者、則洞神之尊神。神寶丈人、則神寶君之祖炁也。丈人是冥寂玄通元无上清虛之炁、九萬九千九百九十萬炁後、至赤明元年、化生神寶君。經二劫、至上皇元年、出書。時號三皇洞神太清太極宮。此三號、雖年殊號異、本同一也。分爲玄元始三炁而治。三寶、皆三炁之尊神、號生三炁、三號合生九炁。

（道藏本『九天生神章經』一a—b）

ここに見える三寶君及び三洞の觀念の用法は左に記す『三皇經』のそれとよく似ていて、一方が他方を参照しているように思われる。そこで兩者を比較検討して、いずれが先に書かれたかを考えてみたい。

黃帝曰、三皇者、則三洞之尊神、大有之祖氣也。

天寶君者、是大洞太元玉玄之首元。

靈寶君者、是洞玄太素混成之始元。

神寶君者、是洞神皓靈太虛之妙氣。

故三元擬變、號曰三洞。氣洞高虛、在於大羅之分。故大洞處於玉清之上。洞玄則在於上清之域。洞神總號、則在於太極。大洞之氣、則天皇是矣。洞玄之氣、則地皇是矣。洞神之氣、則人皇是矣。

天皇主氣、地皇主神、人皇主生、三合成德、萬物化焉。

故天皇起於甲子元建之始、治於太元三玄空天。地皇起於甲申太靈之始、治於三元素虛玉天。人皇起於甲寅虛成之始、治於七微浩鬱虛玉天。

『無上祕要』卷六帝王品所引の『三皇經』

先ず三寶君の用法に注意してみると、序の首段では三寶君の祖氣として三寶丈人が考えられていて、三寶君は三寶丈人から化生したものである。ところが『三皇經』には三寶丈人は全く觸れられていない。この點から考えると、序の首段の方が『三皇經』の後に作られたように推測される。なぜならば、「加上の原則」に依れば、一般に、後出の作品や思想の方が先行の作品や思想で説かれている神格や人物よりも、より高い地位の神格や人物、あるいは時間的・歴史的により古い神格や人物を、立てる傾向にあるからである。

次に、序の首段の神寶君の條にある「時に三皇洞神太清太極宮と號す」という語句に注目したい。ここに「三皇」「洞神」「太極」という觀念が連結しているが、あらかじめ『三皇經』を知っていなければ、この連繫は到底不可能なことのようと思われる。それは次のような理由による。即ち、『三皇經』では「神寶君は是れ洞神皓靈太虛の妙氣なり。……洞神の總號は則ち太極に在り。」とあって、「神寶君」と「洞

神」と「太極」とが一定の連繫の下に考えられている。この點は序の首段でも同じで、「神寶君は則ち洞神の尊神。……時に三皇洞神太清太極宮と號す。」とあって、「神寶君」と「洞神」と「太極」とが一つの系列の中に入れられている。この三つの觀念の連繫は兩者に共通しているから、このことだけではどちらが他方を模倣したのかを決めることはできない。ところが、序の首段の語句にはこの三つの觀念に、更に「三皇」が加わっていたことに注意してほしい。即ち、「三皇」の語が加わっていることによって、序の首段の作者が「神寶君」や「洞神」や「太極」という一連の觀念を『三皇經』から得ていることがわかるのである。

以上の二點から、『九天生神章經』の序の前半部は『三皇經』より觀念や着想を借りて書かれたものである、と斷じてよいであろう。次に三洞の觀念の用法について『三皇經』と『九天生神章經』の序と、更に道典の分類法としての『三洞說』（以下、道典の分類法を指す場合にのみ『三洞說』と表記する）との間にいかなる差異があるのかを見てみたい。この考察によつて三洞の觀念の用法の推移が把握できるようになり、『九天生神章經』の序の位置附けも可能とならう。

さて、『三皇經』における三洞は、「三元擬變して號して三

洞と曰う。」とあるように、首元・始元・妙氣の三元が變化してできた三種の氣の名稱である。それは、「大洞の氣、則ち天皇是れなり。洞玄の氣、則ち地皇是れなり。洞神の氣、則ち人皇是れなり。」という文において、天皇・地皇・人皇の三皇が大洞・洞玄・洞神の三氣であると述べているところにも窺える。あるいは「天寶君は是れ大洞太元玉玄の首元。靈寶君は是れ洞玄太素混成の始元。神寶君は是れ洞神皓靈太虚の妙氣。」とあるように、大洞・洞玄・洞神がそれぞれ氣の名稱の一部として用いられているところからも、三洞が氣の名稱であることがわかる。このように『三皇經』では三洞は氣を表徴する概念であって、經典の分類項目とは全く關係のないことに留意したい。

『九天生神章經』の序の前半部に見える三洞も『三皇經』のそれと大差のないもののように思われる。三洞について述べる「天寶君は則ち大洞の尊神なり」や「靈寶君は則ち洞玄の尊神なり」や「神寶君は則ち洞神の尊神なり」は、『三皇經』の「三皇は則ち三洞の尊神」の三皇を三寶君に代えただけのものであり、三寶君と三洞の對應關係も『三皇經』の「天寶君は是れ大洞。大元玉玄の首元。靈寶君は是れ洞玄。太素混成の始元。神寶君は是れ洞神。皓靈太虚の妙氣。」を模倣し

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立（小林）

たにすぎず、序の前半部における三洞の觀念の用法には獨自性が極めて乏しいから、恐らくは『三皇經』のそれをまねて、三洞を氣の意味で用いているものと思われる。序の後半部には三洞が一例だけ「此九天之章、乃三洞飛玄之氣、三會成音、結成真文、混合百神、隱韻內名」（七b）と見えるが、この三洞は「此の九天の章、乃ち三洞飛玄の氣、三たび會して音を成し、眞文を結成し、」とあるところからわかるように、九天生神章を形成する根源の氣の名稱である。そしてこの文とはぼ同じものが序の前半部にも引かれているから、前半部でも三洞を氣の意味で用いていたものと推せられる。

ところで、三洞が氣の名稱であるにしても、それを道典の分類に項目として用いることは充分に可能である。そこで、次に、序の前半部で三洞を道典の分類に關係して用いているのかどうかを検討してみたい。

序の前半部で三寶君の祖氣である天寶丈人・靈寶丈人・神寶丈人の三寶丈人がそれぞれ龍漢元年・赤明元年・上皇元年に「書を出す」と述べている。もし假にこれらの「書」を分類するとすれば、書を教示した三寶丈人の名に基づいて「天寶」「靈寶」「神寶」の三寶を分類項目として立てるか、あるいは三寶丈人の子である三寶君を區分する「大洞」「洞玄」

「洞神」の三洞を用いるのが便宜であらう。後の《三洞説》が三洞を經典の分類項目にしたのも、恐らくは、序のこの一段にヒントを得たものであらう。しかし、序自体に果して道典を分類しようとする意圖があつたのか、という問題になると、少しく疑問に思われる。なぜならば、三寶丈人の出した經典をすべて一律に、單に「書」とのみ記して、それぞれの書名を具體的に擧げていないからである。もし道典の分類を積極的に企てるのであれば、三寶丈人がいかなる經典を各時代の世に出現させたのかを明確に述べる必要があらう。それが述べられていなければ、三寶や三洞によって道典を分類しようとしても、どの經典がどの項目に配屬されるのが不明であるため、分類も不可能である。換言すれば、經典名を擧げずに、一律に「書」とのみ記したのは、作者に經典を分類しようとする意圖がなかったことを示しているよう。つまり、作者にしてみれば、三寶丈人が「書」を出したことを記すことによって三寶丈人の名を高めるのが肝要な目的であり、三寶丈人が何の「書」を出したのかは特別の關心事ではなかったのである。

ところで、ここで、靈寶丈人の場合にのみ「書」を出し、人を度す。」とあって、書の内容が「度人」を目的とするもの

であることを表示しており、この點からみると、この書が靈寶經を指していることがわかるので、序の作者はやはり、經典の分類を意圖していたのではないか、という疑念が生ずるかもしれない。しかしながら、ここで注意すべきは、靈寶丈人の出した書が靈寶經であるとは、序のどこにも明記していない點である。實は、明記していないのはそれなりの理由があるのである。つまり、假に靈寶丈人の出した書が靈寶經であると明記したとすると、それは一つに、序の後半部で靈寶經の『九天生神章經』が元始天尊から授けられたように述べるのと矛盾することになるからである。また、元始系靈寶經の十部三十六卷は元始天尊が世に出したものの、という元始系靈寶經に關する傳承は靈寶經の形成された當初からのものであるから、序の前半部の作者もそれをよく承知していたはずであり、そのために、その傳承と明らかに齟齬するようなことを述べるわけにはゆかなかつたものと思われる。作者は靈寶丈人の出した書として靈寶經を漠然とながら心に描いていた可能性はあるが、作者がそれを靈寶經であると明記していない以上、あるいは明記できない事情がある以上、われわれの側で勝手に、靈寶丈人の書とは靈寶經を指すと斷定するわけにはゆかない。恐らく作者は、靈寶丈人の名の「靈寶」か

ら靈寶經を連想して、「書を出す」の後に漠然と「人を度す」という語を加えたにすぎず、その書が靈寶經であると積極的に述べる意思はなかったものと思われる。

序の前半部の作者に三寶丈人の出した經典を分類しようとする積極的な意思がないのであれば、當然、三寶や三洞を道典分類の項目として用いる考えもないはずである。即ち、三洞によって道典を分類する思想は『九天生神章經』の序の前半部が作られてから後に興ったものであろう。しかしながら、ここで次のような意見が出るかも知れない。つまり、序の前半部の作者が『三洞說』を無視して書く場合もあり得るから、序の前半部に『三洞說』の考えがなくとも、それは『三洞說』が序の前半部よりも後に作られたという證左にはならない、という意見である。これについては、次に述べる如く、『三洞說』の内容を検討してみると、『九天生神章經』の序の前半部の知識を前提としなければ、到底生じ得るものではないことから、やはり序の前半部は『三洞說』の形成される以前に作成されていたと認めざるを得ないようである。

『三洞說』では洞眞（大洞）部に上清經、洞玄部に靈寶經、洞神部に三皇經を配置するが、これは『九天生神章經』の序の前半部の三寶君の區分に由來するものである。洞眞部

『九天生神章經』の形成と三洞說の成立（小林）

に上清經を入れたのは、序に「天寶君は則ち大洞の尊神」という一條があるからである。この「大洞」は『三皇經』の「天寶君は是れ大洞太元玉玄の首元」の大洞に由來するもので、本來は經典名の『大洞眞經』とは全然關係がないのであるが、『三洞說』の作者はこの「大洞」に上清經の『大洞眞經』を結び附けて、大洞（洞眞）部に上清經を當てたのである。

洞玄部に靈寶經を入れたのも、同じく序に「靈寶君は則ち洞玄の尊神」という一條があるからである。この「靈寶君」や「洞玄」も同じく『三皇經』の「靈寶君は是れ洞玄太素混成の始元。」に由來するもので、靈寶君と靈寶經とは思想的には本來、直接の關係はないのであるが、經典分類に三洞を用いる際、靈寶君と靈寶經とは「靈寶」の語を共有するところから、両者が觀念連合によって關係があるが如く思われて、靈寶君の「洞玄」に靈寶經を當てたのである。この連想による、靈寶經と靈寶君や靈寶丈人との結合は、先に述べた如く、序の前半部の作者にも多少あったようである。

洞神部に三皇經を入れたのは、序に「神寶君は則ち洞神の尊神」と述べた後で「時に三皇洞神太清太極宮と號す」とあって、ここに「三皇」と「洞神」が結び附いていることにヒ

ントを得たものであらう。つまり、『三洞説』は明らかに『九天生神章經』の序の前半部に依據して構成されているのである。換言すれば、『三洞説』が序の前半部より後に形成されたことは、三洞という分類項目の使用と、更にその三洞に配當される經典の類別が序の前半部にヒントを得て行なわれていることを確認できたことにより、一層明らかとなった。

さて、『三洞説』の形成はいつ頃であらうか。これが定まれば、おのずから『九天生神章經』の序の前半部の成立時期の下限が決まることになる。『三洞説』が陸修靜の『三洞經書目錄』で用いられていたことは、その目錄名からして確實であらう。實際に、この目錄に依って作られた宋文明の「靈寶經目」では、例えば「卷目云、太上洞玄靈寶自然至眞九天生神章。」の如く、「舊目」の十部三十六卷の靈寶經のうち、已出の經典名には「太上洞玄靈寶」の語を冠して、これらが洞玄部に屬することを明示している。ところが、ここで興味深いことは、「舊目」では十部三十六卷のすべての經典名が、例えば「九天生神章一卷」の如く、「洞玄」や「靈寶」の語が冠せられていないことである。この差異は、『三洞説』が「舊目」の作成後に行われたことを示唆しているよう。即ち、『三洞説』は「舊目」の作成以後、『三洞經書目錄』の編集

以前、に形成されたはずである。「舊目」の作成時期は推定では劉宋・永初元年(四二〇)前後であるから、『三洞説』の形成は劉宋期に入ってからのことである。

ここで『三洞説』の形成に關連するもう一つの重要な資料に目を向けたい。それは陸修靜が元嘉十四年(四三七)に記した「靈寶經目序」(『雲笈七籤』卷四所收)である。これには「元嘉十四年某月日、三洞弟子陸脩靜、敬示諸道流、相與同法、弘修文業、讚揚妙化、興世隆福、」とあって、「三洞弟子」という語が見える。この「三洞弟子」とはいかなる意味か。「三洞弟子」が洞眞・洞玄・洞神の三洞部の經典すべてを信奉する弟子、という意味であるとすれば、この時點で『三洞説』が行われていたことになる。結論を先に言えば、「三洞弟子」とはそのような意味であつたと思われる。なぜならば、右の引用文で、「三洞弟子陸修靜敬んで諸道流の相與に法を同じくするを示し、」と述べているからである。即ち、陸修靜はさまざまの道流が結局は、同じ法を説くものであることを示そうとしているのであるから、彼が自らを稱して「三洞弟子」と呼ぶのは、自分が諸道流の經典を信奉する者であることを宣示するものであらう。また、「靈寶經目序」のなかで當時の靈寶經の状態を記して「或刪破上清、或

採搏餘經、」とあり、靈寶經に上清經や他の諸經の一部が混在していたように述べているが、ここで上清經を「上清」と呼んでいるのは、當時既に上清經類を包括する「上清」という名稱が使われていたからであり、「靈寶經」や「上清經」という經典の分類名が出来上っていたことを示している。したがって、これらを三洞に配當することが行われていたとしても怪しむに足らぬであろう。即ち、『三洞說』は元嘉十四年(四三七)以前に形成されていたと推測される。

このように『三洞說』成立の下限が決まると、おのずと序の前半部及び後半部の成立時期も限定できよう。即ち、序の前半部は、先に述べた如く、『三洞說』の成立以前に述作されていなければならないから、序の前半部の成立は元嘉十四年(四三七)よりも前に遡り、また『九天生神章經』の九天章と序の後半部は更にそれ以前の述作ということであるから、原本『九天生神章』は永初元年(四二〇)頃に作成されたと推察される。「舊目」と最初の元始系靈寶經の出現が永初元年(四二〇)前後であるから、原本『九天生神章』はその成立が元始系靈寶經のなかでも比較的早い時期のものであると言える。そしてその作者は、他の元始系靈寶經と同様に、葛氏道に屬する道士であろう。

『九天生神章經』の形成と三洞說の成立(小林)

原本『九天生神章』の成立が永初元年(四二〇)頃とする
と、『九天生神章經』の序の前半部はその暫く後の、元嘉七年(四三〇)前後、『三洞說』は更に遅れて、しかも元嘉十四年(四三七)には既に行われていたのであるから、それ以前の成立であり、即ち、元嘉十一・二年(四三四・四三五)頃の形成と見れば大過あるまい。

五 三寶章と序の前半部と太極真人頌

三寶章の部分は『雲笈七籤』卷十六に所引の『靈寶洞玄自然九天生神章經』や南宋の董思靖『洞玄靈寶自然九天生神章經解義』や王希巢『洞玄靈寶自然九天生神玉章經解』や元代の『洞玄靈寶自然九天生神章經注』には缺けている。そのため、三寶章が陸修靜の時代の『九天生神章』にはなく、元代以後に附されたものであろう、という意見もある。しかし、序の前半部に

三寶尊重、九天至眞、祕之大有九重金格紫陽玉臺。自非天地一開、其文不出。元始禁書、非鬼神所聞。

(道藏本『九天生神章經』三b)

とあり、ここにいう「三寶」や「九天」は「之を大有九重金格紫陽玉臺に祕す。」とか、「其の文」とか、「元始の禁書」と

か、言われているところからわかるように、天書、即ち天上界の文書のようなものである。「三寶」や「九天」が天書であるとすれば、三寶章と九天章以外にこれらに該当するものはないであろう。そうすると、序の前半部の作者は三寶章を知っていたことになり、當然、陸修靜の時代の『九天生神章』に三寶章は載せられていたはずである。

この推測を確かめるために、次に三寶章の思想を分析して、これが陸修靜の時代の作品と認めることができるかどうかを検討したい。もしその思想が劉宋期の道教思想と符合し、更にこの時期の靈寶經に收められていたとしても不自然ではないことが確認されれば、序の前半部の「三寶」の語句の用法から推測された三寶章の存在は間違いない事實として認めてよいであろう。

結論を先に言えば、三寶章の思想は劉宋期の天師道の思想と合致する。それは一つに、劉宋期の天師道が初めて唱えた「三天」の思想に基づいて書かれているからである。天寶章に「正一の法を洞明し、六天の文を嚴修す。」とあるのは、三天の正法である正一盟威の道を明らかにして、六天の邪文を嚴しく取締るという意味で、これは「三天」の思想に基づくものである。また靈寶章の「左に三天の文に命じて、右に六

天の兵を攝す。」とは、三天の文（三寶章）を誦えて、六天の鬼兵を統制し屈服せしめることを修辭的に對句を用いて表現したものであり、これも「三天」の思想である。その他、靈寶章に「乃ち正法の明を覺る」、神寶章に「妙なるかな。正法の文」とあって、「正法」が贊美されているが、これも正一盟威の道を「三天の正法」と説く『三天内解經』の「三天」の思想に由るものであらう。

劉宋期の天師道のなかで靈寶經を尊重する靈寶派は、天師道の最高の聖典である老子道德經以外に、靈寶經や上清經や三皇經等々の諸道典を尊尙していた。天師道靈寶派の陸修靜が自らを「三洞弟子」と稱して、靈寶經の目録の序である「靈寶經目序」を作成しているのも、その一例證である。三寶章にもこの天師道靈寶派の特色が見える。天寶章に「奕奕たり、帝一の尊。落落たり、高上の章。」とあるが、ここの「帝一」や「高上」は上清經の『大洞真經三十九章』の尾章の「帝一尊君章」と首章の「高上虛皇君道經」を指している。即ち、この句は上清經のなかの最上の聖典である『大洞真經』を稱えているのである。

三寶章には、更に、劉宋期の天師道の終末論⁽¹⁰⁾に基づく太平の世の到來や後聖君の出現の豫言、あるいは玄元始の三氣説

や清微・禹餘・大赤の三天説が述べられていて、その思想は劉宋期の天師道靈寶派の思想と合致する。靈寶經や上清經を尊尙する天師道靈寶派が原本『九天生神章』に後から三寶章を加えたとしても、思想的には不自然ではなく、充分に領けることである。

では、三寶章はいつ頃、いかなる目的で載せられたのであろうか。この問題を、同じく三寶君について觸れる序の前半部との思想的連關に注目して、考えてみたい。

序の前半部では初めに三寶君について述べた後、次のように記している。

此三號雖年殊號異、本同一也。分爲玄元始三炁而治。三寶、皆三炁之尊神。號生三炁、三號合、生九炁。

（道藏本『九天生神章經』一b）

ここにいう「三號」とは、この文の前で、三寶君の治める天宮をそれぞれ「時號高上大有玉清宮」や「時號上清玄都玉京七寶紫微宮」や「時號三皇洞神太清太極宮」と記しているのを受けるようである。即ち、「三號」とは、高上大有玉清宮と上清玄都玉京七寶紫微宮と三皇洞神太清太極宮の三宮を指す。そして「三寶」とは、天寶・靈寶・神寶を指す。そうすると、右の文は、三宮は時代によってその名が異なるが、本

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立（小林）

來一なるもので、その一が分化して玄元始の三氣が生じ、この三氣の尊神は天寶・靈寶・神寶の三寶であり、一宮は三氣を生じ、三宮が合して九氣を生じた、というようである。これによると、三宮と玄元始の三氣は同じものようであり、三寶は三氣を治める神格のようである。そして九氣とは三宮が合して生じたものであるが、これはつまり、玄元始の三氣が三分して出来たものようである。この過程を單純化して示せば、一氣が分化して玄元始の三氣（三宮）が生じ、更に三氣が分化して九氣（九天）が生じた、と考えているようである。このことは、先の文に續いて述べる宇宙生成論でも同じである。それは次のようにいう。

九炁出乎太空之先、隱乎空洞之中、無光無象、無形無名、無色無緒、無音無聲、導運御世、開闢玄通、三色混沌、乍存乍亡、運推數極、三炁開光、炁清高澄、積陽成天、炁結凝滓、積滯成地、九炁列正、日月星宿、陰陽五行、人民品物、並受生成。天地萬化、自非三元所育、九炁所導、莫能生也。三炁爲天地之尊、九炁爲萬物之根、故三合成德、天地之極也。

（道藏本『九天生神章經』一b―二a）

ここでは、一旦生じた九氣が空洞の中に隠れて宇宙は無光

無象、無形無名、無色無音の混沌とした状態になり、それから一定の年劫を経ると、三氣が生じて光を放ち、その三氣から天と地が形成され、その後で（三氣が分化して）九氣が生じ、その九氣がすべて整うと、そこから日月星辰や陰陽五行や人民や萬物が生成する。それ故、三氣は天地を形成した尊貴な存在であり、九氣は萬物を生成した根本である、と考えるようである。このような宇宙生成論が序の前半部に述べられているのは、九氣、即ち九天の生成過程と、萬物の根源としての九天の價值を説こうとするものである。しかし、序の

前半部の冒頭の三寶君の條から右の宇宙生成論に至る一段を讀んでみると、作者は九天そのものよりも、むしろ九天の根源となる三寶や三宮や三氣の方に叙述の重點を置き、そちらに強い關心を向けているように感ぜられる。三寶や三宮や三氣が重視されているのは、序の前半部が三寶章を附加するために作られたからではあるまいか。假に三寶章がないものとして想定してこの一段を讀んでみると、なぜ作者が三寶や三宮や三氣をこれほどまでに強調するのか、その理由が理解できないのである。そもそも三寶君の條をなぜ冒頭に置くのかさえ解し難い。つまり、三寶章がなければ、序の前半部の首段を書く意味がないのである。先に引用した序の前半部の一節に

「三寶尊重、九天至眞」とあって、三寶章と九天章を並記して贊美するのも、序の前半部が既にある九天章の前に三寶章を附加するために書かれたことを示唆している⁽¹¹⁾。

三寶章が劉宋期の天師道靈寶派の手に成るものであれば、序の前半部も同一の作者か、あるいは同じ派に屬する人物によつて書かれたものであらう。更に、『九天生神章經』の最後に附されている太極真人頌二首も天師道靈寶派の作のようである。劉宋期の天師道靈寶派が太極真人を尊崇していたことは、同派の作である仙公系靈寶經を見れば、明らかである。仙公系靈寶經は太極真人徐來勒が葛仙公に授けたものと傳承されていたのである⁽¹²⁾。したがって、太極真人頌二首も、天師道靈寶派の道士が原本『九天生神章』に三寶章と序の前半部を挿入する時に一緒に加えたものと考えられる。そうすると、三寶章と太極真人頌二首の編入の時期は、序の前半部の作成と同じ時期であるから、先に見た如く、それは元嘉七年（四三〇）前後と推察される。

『九天生神章經』の經題の後に「三寶大有金書」とあり、『雲笈七籤』卷十六所引の『靈寶洞玄自然九天生神章經』にも「一名三寶大有金書」とある。道藏本『靈寶自然九天生神三寶大有金書』では、「三寶大有金書」が經名として用いら

れている。「三寶大有金書」を『九天生神章經』の別名とするようになったのは、三寶章や序の前半部が附加されたときからではあるまいか。いかに早くとも、この時期を遡らないことは明らかであろう。

六 結 語

以上の考察によって、『九天生神章』が二段階を経て形成されていることが明らかとなった。先ず、道藏本『九天生神章經』のなかの序の後半部と九天章とから構成される原本『九天生神章』一卷が元始系靈寶經の一つとして、劉宋・永初元年(四二〇)頃に葛氏道の道士によって作成された。次に、元嘉七年(四三〇)前後の時期に、道藏本『九天生神章經』のなかの序の前半部と三寶章と太極真人頌二首が加えられて、『九天生神章』が作られた。その作者は天師道靈寶派の道士である。道藏本『九天生神章經』はその構成と内容から見て、この二次的に編纂された『九天生神章』と同じものである。

原本『九天生神章』が葛氏道の手によって作られ、その後天師道靈寶派によって三寶章や序の前半部や太極真人頌が加えられた経緯は、劉宋期の葛氏道と天師道との關係を考える

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立(小林)

上で興味深い事實である。劉宋期の天師道は葛氏道の元始系靈寶經を自派の經典のなかに積極的に攝取し、併せて天師道の思想を色濃く織り込んだ仙公系靈寶經を陸續と作成し、本来ならば葛氏道の手によって作られるべき「舊目」の十部三十六卷の元始系靈寶經のなかの幾つかの經典をも天師道が編纂してしまった。¹³『九天生神章』の形成も天師道のこの一連の活動と連繫するものである。劉宋期の天師道靈寶派の思想が如實に現われている三寶章や太極真人頌二首を加えたのも、葛氏道の靈寶經を天師道の靈寶經に變えるために行われたのである。天師道は自派の靈寶經に改變した『九天生神章』に基づいて、『三洞説』を形成したのである。『三洞説』が陸修靜の『三洞經書目錄』や『靈寶經目序』に見られることや、上清經・靈寶經・三皇經等の諸道典を同じ一つの「道教」という宗教の經典として總合し、それを分類するという『三洞説』の考え方が、老子道德經を最上の聖典としながらも、上清經や靈寶經や三皇經、あるいはその他の道典をも積極的に自派の經典のなかに取り入れてゆく天師道靈寶派の思想とよく合致するところから、『三洞説』は天師道靈寶派の陸修靜によって創始されたものと推察される。

『三洞説』以外にも、天師道が新たに加えた序の前半部や

三寶章から、後に道教の教理體系を形成する上で重要な役割を果す思想が形成された。梁の武帝の時に編纂された『太上洞玄靈寶業報因緣經』(道藏三三六)卷十敍教品第二十六に⁽¹⁴⁾

道君曰、元始以一炁化生三炁、分爲三天。一曰、始炁爲清微天、號玉清境、天寶君所化、出洞眞經十二部、以教天中九聖。二曰、元炁爲禹餘天、號上清境、靈寶君所化、出洞玄經十二部、以教天中九眞。三曰、玄炁爲大赤天、號太清境、神寶君所化、出洞神經十二部、以教天中九仙。
(卷十・四a—b)

とあるが、この考え方の源流は『九天生神章經』の序の前半部と三寶章にあると言える。序の前半部の三寶君の條には、天寶君・靈寶君・天寶君の三寶君と、大洞・洞玄・洞神の三洞と、玉清・上清・太清の三清とが相連繫するものとして説かれており、三寶章ではその章題が「始青清微天寶章」・「元白禹餘靈寶章」・「玄黃太赤神寶章」とあるように、玄元始の三氣と、清微・禹餘・太赤の三天と、天寶・靈寶・神寶の三寶とが連結されており、これらの組み合せは右の『太上洞玄靈寶業報因緣經』の敍教品と一致するであらう。更に、敍教品にいう「九聖」・「九眞」・「九仙」の神仙二十七品の分類も、同じく劉宋期の天師道靈寶派の道士で、『夷夏論』の著

者である顧歡が唱えたものであることを考えると、敍教品のような敍説の體系化も、劉宋期の天師道靈寶派によって準備されていたものであることが理解されよう。⁽¹⁵⁾

最後に、『九天生神章』にあった三靈章がいつ頃から脱落して、『雲笈七籤』の所引本や南宋期の『洞玄靈寶自然九天生神章經解義』や『洞玄靈寶自然九天生神玉章經解』や元代の『洞玄靈寶自然九天生神章經注』のような『九天生神章經』が世に行われるようになったのか、を考えてみたい。

『無上祕要』卷二十四三寶品に「洞玄九天經」の名で『九天生神章經』の序の前半部の三寶君の條が引かれているが、これには三寶章は附されていない。三寶品という品題からすれば、ここに三寶章が當然引用されていてよいであらう。北周の武帝の末年頃の『九天生神章經』には既に三寶章はなかったのかも知れない。敦煌資料(P二二五六)の宋文明『通門論』卷下には

譜者記其源之所出、如生神章前三寶君章、及本業君自序宿命根之例、是也。
(二八〇—一八二行)

とあって、梁末の『九天生神章經』には九天生神章(九天章)の前に三寶君章があったようである。この三寶君章は三寶章を指すのか、それとも序を三寶君章と呼んでいるのか、判然

としない。右の引用文の趣旨からすれば、三寶君章では『九天生神章』という經典の來源を述べているようであるから、序を指しているように解せられる。序を三寶君章と呼ぶのは、序の冒頭が三寶君の記述で始まるからであろう。もしこれが序のことであるとすると、右の引用文によれば、九天生神章（九天章）の前に直接序があったことになるから、三寶章はなかった可能性が強い。梁末の『九天生神章經』には既に三寶章のないものがあったのかも知れない。

三寶章の脱落した『九天生神章經』が現われた時期は結局、不明であるが、三寶章が脱落してしまったのは、『九天生神章』という經名から、九天章のみあればよく、三寶章は不要なもののように思われるようになったからではあるまいか。道藏本『三寶大有金書』の如く、『九天生神章經』の別名であった「三寶大有金書」を正式の經名にして、肝心の九天章を削除してしまう經典も現われるくらいであるから、『九天生神章』という經名に影響されて三寶章を除く經典が現われるのも不思議ではないであろう。

註

- (1) 宋文明の「靈寶經目」については、大淵忍爾『敦煌道經』、『九天生神章經』の形成と三洞説の成立（小林）

目録篇』（三六五—三六八頁。一九七八年）参照。

- (2) 拙稿「劉宋における靈寶經の形成」（『東洋文化』第六十二號。一〇〇—一〇四頁。一九八二年）参照。

- (3) Ōuchi Ninji "On Ku Ling-pao-ching" (*Acta Asiatica* 27, p. 47 No. 5, 1974) 参照。

- (4) 序の後半部には「三寶」の語が「或以篤好三寶、善功徹天。或供養三寶、爲三官所稱。」(六a)という一節に用いられている。(後者の「三寶」は、『雲笈七籤』所引本を始め、他本では「師寶」とある。)但し、これらの「三寶」は佛教の佛法僧の三寶をまねて作られた道寶・經寶・師寶の三寶を指し、三寶章の意味ではない。例えば、「篤好三寶」の用例は『太一玄一真人說妙通轉神入定經』(道藏三四七)に「篤好三寶、志慕神仙、當思念善功、廣建福田。」(一a)と見え、「供養三寶」の用例は『洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明真科』(道藏一四〇〇)に「宗奉至經、供養三寶、廣門法門」(六a)や「敬樂神明、供養三寶、禮受師宗、命過昇天、」(五a)とある如く、道・經・師の三寶を篤く好み、供養することは劉宋期の靈寶經で廣く説かれているから、この考えが『九天生神章經』の序の後半部に見えていても不自然ではない。

- (5) 「舊目」については前掲の拙稿（一〇六—一二頁）参照。

- (6) 『三皇經』の述作年代については、まだ定説はないよう

ある。この經典が『抱朴子』所引の「三皇文」や「三皇内文」に關連するものであることは、既に先學の指摘する通りである。福井康順『道教の基礎的研究』(一七〇—一七七頁。一九六五年版)や大淵忍爾『道教史の研究』(二七七—三四三頁。一九六四年)参照。

「三皇文」に基づいて新たに『三皇經』が作られた時期は、東晉末と推定される。劉宋・永初元年(四二〇)前後に作成された『太上洞淵神呪經』(道藏三三五)の卷一に「三洞流布、不知受持。」(一b)、卷二に「今有三洞經出。不知受之。」(一a)、あるいは卷五に「奉受三洞者、悉是天上來也。」(一a)や「道言、自今以去、若有道士、受此三洞經、力行化求道、遵奉三尊、救度愚人者、我亦遣十方天丁・三十六天力士、覆護法師。」(一b)とあって、『三洞經』の受持を人々に勧めている。ここにいう「三洞」や「三洞經」は『三皇經』を指すようである。『三皇經』を「三洞經」と呼ぶ例は、同じ劉宋期の仙公系靈寶經である『上清太極隱注玉經寶訣』(道藏四二五)に「三皇天文、或云洞神、或云洞仙、或云太上玉策、此三洞經、符道之綱紀、太虛之玄宗、上眞之音經矣。」(十二a)と見える。『三皇經』を「三洞經」とも呼ぶようになったのは、北周・道安の『二教論』明典眞僞第十に「晉元康中、鮑靖造三皇經、被誅。事在晉史。後人諱之、改爲三洞。」(大正五二・一四一b)と説明している。果して

これが史實であるかどうかは不明であるが、『三皇經』が「三洞經」ともいわれたのは事實であり、『三洞經』という經名が附されたのは『三皇經』に「三皇者、則三洞之尊神。」とあるのに基づくものであらう。

『太上洞淵神呪經』では『三洞經』と『神呪經』は區別されておき、『三洞經』は『神呪經』の別稱ではない。そして卷二に「今有三洞經出、不知受之。」とあるように、『三洞經』即ち『三皇經』は『太上洞淵神呪經』の述作からさほど遡らない時期に作られたものである。したがって、『三皇經』の成書は東晉末と推定される。この推定は、『三皇經』に基づいて『九天生神章經』の序の前半部が書かれたとする推測とも、時代的に齟齬せず、うまく合致する。

(7) 「舊目」の作成時期については、前掲の拙稿(一一二・一三二・一三三頁)参照。

(8) 注(3)に掲載の大淵博士の論文(四七頁)参照。

(9) 「三天」の思想については、拙稿「劉宋期の天師道の『三天』の思想とその形成」(『東方宗教』第七十號。一九八七年)参照。

(10) 劉宋期の天師道の終末論については、拙稿「劉宋期の天師道の終末論」(掲載誌未定)参照。

(11) 序の前半部と後半部とは九天生神章の略稱に差異があり、前半部では「九天生神寶章」や「寶章」とあり、後半部

では「九天生神玉章」とある。九天章の中でも「玉章」とあるから、原本『九天生神章』では「九天生神玉章」や「玉章」という略稱を用いていたようである。ところが、前半部に「九天生神寶章」や「寶章」とあるのは、前半部が作られたときに、九天章に三寶章が附加されたために、この二つを一括して「九天生神寶章」や「寶章」と呼んだものと思われる。

- (12) 仙公系靈寶經については注(2)に掲載の拙稿(一二六一—三二頁)参照。

- (13) 注(2)に掲載の拙稿(一二七頁)参照。

- (14) 『太上洞玄靈寶業報因緣經』の成書年代やその思想については、一九八〇年秋にバリで開かれた第一回道藏研究國際會議で發表した拙稿“Analysis of the *Tai-shang dong-xuan ling-bao ye-bao yin-yuan jing* 太上洞玄靈寶業報因緣經”(未公刊)参照。

- (15) 『南齊書』卷五十四高逸・顧歡傳に載せる顧歡の袁粲に宛てた答書に「神仙是大化之總稱、非窮妙之至名。至名無名、其有名者二十七品、仙變成眞、眞變成神、或謂之聖、各有九品、」とある。

(補記) 道藏番號は『道藏子目引得』(哈佛燕京學社引得第二十五號)に依る。

『九天生神章經』の形成と三洞説の成立(小林)